

新学術領域研究第4班研究会「オスマン帝国史：比較の視点から」

- 日時：2011年7月9日（土）9時30分～11時45分
- 場所：北海道大学スラブ研究センター4階大会議室（403室）
- 報告：秋葉淳（千葉大学大学院人文社会科学研究所）

「19世紀オスマン帝国における領土的編制と領土的想像力」

佐々木紳（東京大学大学院特任研究員）

「近代オスマン帝国の知識人と帝国意識」

この研究会では、19世紀後半のオスマン帝国に関して2本の報告が行われ、縮小しつつあった同帝国が「近代化」と如何にして向き合い、どのような「帝国意識」を持っていたかについて論じられた。

まず秋葉報告では、1840年頃に開始されたタンズィマート改革が取り上げられ、行政区域の再編制や税制改革が行われた点が指摘された。また、1864年からは州制改革が行われ、中央集権的な統治システムの導入が模索されたが、帝国全域に画一的な州制度が導入されたわけではなく、レバノン山岳地帯のように特別法が施行される地域やエジプトやボスニアのような「特権諸州」も見られた。1870年代の第一次立憲政期においても、特権諸州のように代議員が選出されない地域が存在したのである。

同報告では、こうした領土的編制の問題に加え、帝国自身による「領土的想像力」についても論じられた。1846年には『国家年鑑 salname』が発刊され、国家機構の総覧が定期的かつ体系的に示されるようになったが、これは官僚を中心とする読者に対して帝国領を一望させ、統一的な領土認識を醸成する役目を果たしたと言える。学校教育で用いられた地理教科書も、国土に関する情報を可視化し、帝国の多民族・多宗教性を強調する機能を果たしていた。だが、『国家年鑑』は外国による占領をあたかも存在しないかの如く扱い、特権諸州についてはごく僅かの事項しか記載していなかった。地理教科書についても、帝国の隅々に至る規格化された情報を提供しつつ、そこで描かれた領域は実際に主権が及ぶ範囲と異なっていた。その点では、帝国によって提示された年鑑や地理教科書は、オスマン帝国の「領土的想像力」を示すと同時に、収縮する帝国の現実との乖離を如実に示すものでもあった。

次の佐々木報告では、1860年代後半に展開された新オスマン人運動と、70年代前半にオスマン帝国で高揚したパン・イスラーム論議が取り上げられ、ムスリム・オスマン知識人の「帝国意識」が検討された。近代オスマン知識人の思考様式には、帝国主義・植民地主義の「客体」でありながら「主体」でもあるという両義性が内包されており、一方では列強に対する自らの「文明性」を主張しつつも、他方では「周縁」の「未開」集団を「文明化」するという意識が生じていたと考えられる。

新オスマン人とは、1860年代から70年代にかけて新聞・雑誌を通して立憲運動や新聞学運動を展開したムスリム知識人グループのことである。彼らは、オスマン領内のクレタ

問題（1866-69年）をインド大反乱（1857年）やポーランド一月蜂起（1863年）等と比較し、インドやポーランドの問題を放置しつつオスマンの国内問題に干渉しようとする列強の「ダブル・スタンダード」を批判した。また彼らは、ヨーロッパのイスラームに対する「偏見」に対抗し、自らの文明論的優位を強調する一方、ヨーロッパ的平等には反対した。新オスマン人は、臣民の権利と義務に関する「正当な平等」を肯定的に評価したものの、支配層と被支配層、すなわちムスリムと非ムスリムとの「絶対的な平等」には反対したのである。1860年代末には、ロシアの進出やドイツの台頭といった国際情勢の変化に対応する形でパン・イスラーム主義が唱えられるようになった。この思想は元々世界各地のムスリムの連帯を志向するものであったが、帝国内ムスリム臣民の統合を進めるイデオロギーへと結晶化した。

以上の2報告に対し、オスマン帝国が帝国主義の「客体」でもあり「主体」でもあったという佐々木氏の指摘は重要であり、同帝国がイギリス帝国よりも「プレッシャー」を受けていた分、より強い「帝国意識」を持っていたのではないかと、とのコメントがなされた。その点では、「帝国意識」は比較帝国史を考えるうえでも興味深い分析概念と言える。また、末期のオスマン帝国は、バルカン地域を失うことで自らのイスラーム性を強調するようになり、アラブ地域を失うことで自らのトルコ性を強調するようになったのであり、同帝国の描く自画像は自らの収縮に対応したものではなかったか、との指摘がなされた。

秋葉報告に関し「東洋」認識について質問が行われたところ、地理教科書における「東洋」の扱いは大きくなく、極東に関しても、1890年の和歌山沖エルトゥールル号遭難事件や日露戦争までは帝国側の知識は乏しかったとの回答であった。また、行政区域に関する質問がなされたところ、当時の帝国では各地域が個別の名称を持っており、統一的な名称は存在しなかったとの回答であった。「自治」という言葉はクレタに対して初めて適用されたものであり、「特権諸州」についても19世紀後半から使われるようになった言葉である。その他、『国家年鑑』などによる官製の領土的想像力に対する一般官僚の反応と受容、オスマン帝国による古代遺跡の「発見」と「所有」の実態、ロシア帝国における地理学との相違点、といった点に関して質問が出された。

佐々木報告に関し1860, 70年代の時代性について質問が出たところ、1870年代後半のロシア・オスマン戦争を境にして領域的イメージが大きく変化したのは事実であり、比較的「余裕」のあった60, 70年代と列強の領土拡張傾向が強まった80年代以降とは雰囲気がいぶん異なっていると回答がなされた。シーア派など帝国外のイスラームに対する見方について質問が出たところ、イスラームに対する認識は或る意味「柔軟性」を有しており、シーア派を除くイスラームの統一といった見方も存在したと回答がなされた。イスラーム知識人のトルコに関する表象について質問が出たところ、言語的な区分としてテュルクという名称が存在するが、これはヨーロッパから「逆輸入」された可能性が高く、最初から明確なトルコ・イメージが存在したわけではないとの回答であった。

（文責 福田 宏）